
剣に乗って異世界へ

kan_sta_ku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣に乗って異世界へ

【コード】

N9097T

【作者名】

k a n | s t a | k u

【あらすじ】

テスト帰りの男子高校生…

目の前には一振りの剣……

少年が鞘から剣を抜くと突然青く光り輝き、気がついたら異なる世界に……

少年は少女と出会い、新たな世界で奮闘しながら生きていく……

感想、アドバイスなど待っています……

ープロローグー（前書き）

短めですすいません

プロローグなのでご勘弁をっ！

「プロローグ」

「テストやつと終わった…」

人気のない道を一人の少年が歩いている

この少年は鹿内創輝^{かないそうつき}、顔が良いのと友達が少ないのを除けば、いたって普通？の高校生だ

彼は期末テストを終えて帰宅中である

(?…なんだあれ?)

創輝は道の真ん中に光る何かを見つける

その何かはふわりと浮き上がりゆっくりと創輝のほうへやってくる

創輝のほうへやってきたのは金属の鞘に入った剣だった

創輝は鞘から剣を引き抜いてみる

(きれいな剣だな…だがちょっと刀に近いか)

創輝がそんなことを考えていると急に剣が青白く光り出す

そして光がどんどん強くなり、あまりの光に創輝は気を失った

―第1話―

爽やかなかぜがふき草が鳴る音で創輝は目を覚ます

(ここは…どこだ?)

創輝の周りには気を失う前の住宅街ではなく、草原が広がっている
変わっていないのは創輝の服装と剣のみだった

創輝は剣を鞘にいれ、立ち上がる

(とりあえず歩くしかないか…)

創輝は気の向くまま歩き始めた

20分程度歩くと3人の人影がみえてきた

よく見ると、1人の少女に2人の黒服を着た男が詰め寄っている

(あれ、どう考えてもよろしくない状況だよな…)

創輝は身をかがめ、ゆっくりと近づいていく

(な、なんでこんなことに…)

ミューリの前には黒服の2人組

「あ、あなたたち誰？」

「君に答える必要はないな…それより我々と一緒に来てもらおうか」

1人がミューリの手をつかむが振り払って1歩下がる

「そうか…なら少し痛い思いをしてもらわなきゃならんな」

そう言っつて剣を引き抜く

「い、いやっ……」

ミューリは後ずさるがつかまずいて座り込んでしまっ

(だ、誰か…助けて)

そして剣が振り下ろされる

思わずミューリは顔を背け目をつぶった

創輝が様子を伺っていると黒服の1人が剣を抜き少女に切りかかった

(あんまり面倒に首ツッコミたくはなかったんだが…しょうがない)

創輝は剣を鞘からぬき鞘を投げる

鞘は真つ直ぐ、剣を持った黒服に向かって飛び頭にあたり気絶する

「何だあ？」

「いやあ、すいませんね。ちょっとほっとけなくて手が滑っちゃいました」

「全く邪魔だなお前は…フラヴ！」

とつさに創輝は横に飛ぶ

すると黒服の飛ばした火の玉が創輝のいた所を通り過ぎていった

(なんだ今の！…こりゃちょっと本気ださなきゃだめか…)

創輝は刀を構える。刀は青白く光を放っている

創輝は黒服に向かって走り出す

「ほう、かわつたもん持ってんな…フラヴ！」

黒服は今度は3つ火の玉を飛ばしてくる

創輝は屈みながらジグザグに走り2つをかわすと残りの1つは回転して切り裂いた

「前言撤回だ。お前おもしろいな」

創輝は黒服に切り掛かる

黒服は剣で受け止めるが剣は呆気なく砕け散る

創輝は足払いをかけ転ばせ、喉元に突き付ける

「お前若いのにやるな」

「あなたこの状況でよくそんな台詞がはけますね、まああなた本気じゃなさそうでしたし……はあ、じゃあもうその娘に構わないって誓ってください」

「ああ、いいだろう」

「そうですか…ならもう行って下さい」

「そつだ、お前名前は？」

「名前を聞く時は自分から名乗るもんですよ」

「そつだな、悪かった…俺はライナード・クレイルだ」

「俺は鹿内創輝です」

「そつか、また会うことになるかもな。じゃあな…おい行くぞ」
ライナードはもう1人を起こし去っていった

「君、大丈夫でしたか？」

創輝は刀を鞘におさめてから少女に声をかける

「う、うん。ありがとう。えっと鹿内君？」

「そうですよ」

「私はミューリ・ストライト、15歳。ミューリと呼んでね」

「俺も15歳です。俺も創輝でいいですよ」

「敬語は止めて…ね？」

「今は”これが素なのですが……………まああなたならいいでしょう。わかったよミューリ」

「うんよろしくね創輝…ところで創輝はなんでこんなところにいるの？」

「俺もよくわからない。この剣を握ったらものすごく光って。気がついたらここにいた」

創輝は刀を見せながら説明する

「へえ綺麗だね、でもそんなのみたことないなあ…おじさんなら分かるかも…ふーん……………って、創輝ここどこかわからないってこと!？」

「まあそうなるかな…ちなみにここはどこ？」

「えっと、セニリ八高原だけど」

「セニリ八高原？…まさか…一応聞くが日本とか東京とか分かるか？」

「ゴメン分らないよ」

「はあ…そんな…信じられない…」

「ど、どうしたの？」

「俺は…違う世界に来たみたいだ」

「……………ええええー！」

「ど、どうしよう…」

「どつりで黒目黒髪なんて珍しいと思った…それに魔法を剣で切るなんて」

「魔法？魔法ってさっきの火の玉のことか？」

「もしかして…魔法知らないの？」

「ああ…俺がいた所じゃ架空の話だったよ。ミューリも使えるのか？」

「この世界の人は多かれ少なかれ使えるんだよ」

「じゃあミューリもさっき使えば良かったじゃないか」

「うつ／＼…さっきまで練習してたから魔力切れてたの!…そ、そんなことより創輝これからどうするの?」

「タイミング悪かったんだな……どうするのっていわれてもな……」

「じゃあ私の家においでよ!」

「そんな…悪いよ」

「いいの!お父さんお金余って困るって言ってたから、一人くらい大丈夫だよ!それにさっきのお礼!……それとも、嫌?」

ミューリは上目遣いに聞いてくる

「うつ…そんな可愛い顔で言われたら断れないじゃないか」

「ふえっ!…可愛い／＼」

「どうした?」

「な、なんでもないよ!ほら行こっ!」

「ちよっ、待ってよ!」

ミューリは創輝の手を掴み駆け出した

― 第2話 ― (前書き)

欠けているところがあったので書き直しました

―第2話―

「おお！！大きい街だな」

「そうですね？この世界で6番目に大きい街なんだよ」

創輝とミューリはミューリが住んでいる街、エシユリケートの前にいる

2人は門に向かって歩いていく

門の前には2人の門番が立っている

「何者だ！」

2人は創輝に向かって剣を振る

「ダメーっ！」

ミューリが2人に叫ぶ

剣は首筋の寸前でとまる

「し、しかし」

「彼は私の友人です」

「鹿内創輝といます」

「そうかそいつは悪かったなあ、俺はマイト・ガイラーだ。よろしくな、ぼつず」

「先輩！言葉づか、うつさいな！いいだろ別に！だいたいお前は堅っかしいんだよ！」…はあ、まったく…失礼しました。わたくし、カリユウ・シーラムです。先程は申し訳ありません」

「マイトさんにカリユウさんですね。もう気にしないで結構ですよ」

「創輝どんだけ人いいの？」

「まあいいじゃん、ミューリのおかげで何事もなかったんだし」

創輝はミューリに笑顔を向ける

ミューリは思わず顔を背けた

「／／…と、とにかく！早く行こう！」

「わかったわかった…では失礼いたします…ミューリ！待ってよ！」

「お嬢もとうとうそんな年頃なんだなあ」

「ミューリさん、ガンバです」

2人はそんなことを言いながらミューリと創輝を見送った

しばらく進むとメインストリートのようなところにいきました

両脇には店が建ち並び、たくさんの人で賑わっている

道は真っ直ぐで奥には大きな建物が見える

「ミューリの家はここから遠いのか？」

「まだもうちょっとかな。もう見えてはいるんだけどね。それにもうすぐ迎えよ」お待たせ致しました。お嬢様」

何も無いところからいきなり黒いスーツを着た男が現れた

「紹介するね。彼は家で執事をしているマイルだよ」

「私、ストライト家の執事のマイル・コーミルでございます」

「僕は鹿内創輝です。」

「鹿内様はお嬢様のお友達で？」

「さっき2人組の男に襲われたときに助けてくれたの」

「2人組の男ですか……ああなるほど……」

「どうかしたの？」

「いえ、なんでもありません。鹿内様、お嬢様を助けていただきありがとうございます」

「いや、そんなに気にしなくても結構ですよ」

「そうですか。では行きましょつか」

マイルはおもむろに金属の輪を取り出す

ミューリは輪をマイルと掴む

しかし創輝は首を傾げる

「あの…ミューリ？」

「ああ、そっか。これに捕まって」

創輝も輪を掴むと3人は大通りから姿を消した

「はい、とうちやあく！」

目の前にはさつき見えた大きな建物が建っている

「えっ？えっ！？…今何が？」

「さっきのはソーシエリーリングって言って1つ魔法が入ってるの。さっきのはムラルっていう魔法で簡単にいえば瞬間移動ね」

「創輝様はソーシェリーリングをご存知ないのですか!？」

マイルは驚き尋ねる

「ちょっと訳ありなのよ。それとお父さんに話があるんだけど…」

「ご主人様でしたら、書齋にいらっしやいますと思ひますが」

「わかったわ、じゃあ行こう創輝」

「おう。マイルさんありがとうございます」

「いえ、何かございましたら、私にお申しつけください」

2人は屋敷の中を歩いていく

「しっかし広いなあ」

「まあね。この町作ったのお父さんだし」

「うわあ…そりゃすごいな」

そこまで言ったところでミュージーリが立ち止まる

「ここだよ」

ミューリがノックする

「お父さん！入るよ！」

「はいよ」

2人が入ると中はたくさんの本と1振りの剣が置いてある

「おや？君は？」

「彼は創輝だよ、さっき2人組の男に襲われた時に助けてくれたの」

「はじめまして、鹿内創輝といます」

「そうか、ありがとう。感謝するよ。僕はミューリの父のフラークだ」

「相手は本当に殺意があるわけじゃなさそうでしたが念のために介入させていただきました」

「そうか、やはりな……」

「何か心当たりが？」

「おそらく学園だろう、あそこは変わってるからな……そんなことより何か話があるんじゃないのかい？」

「あっそうだった。実はね、信じられないと思っけど、創輝は違う世界から迷い込んだんじゃないかみたいなの」

「やはりか…」

「やはりってお父さんわかってたの？」

「まず第一に黒目黒髪なんてこの世界じゃ見ないからな。それと創輝君はともかくミューリは僕のファーкул忘れたのか？…ああ簡単に言えば特殊スキルだな。僕は5日前からの行動を見ることができ
るんだ」

「そうだったね…それで…そのう」

「家に住んで貰うってことかい？」

「さっすがお父さん！で…ダメかな？」

「別に構わないよ」

「やった！よかっただね創輝！」

「すみませんなんだかお世話になることになってしまって」

「いいんだよ、妻やハシユーも喜ぶだろうし」

「ありがとうございます。これからよろしくお願いします」

「じゃあミューリ、ハシユーとケイラの所に案内してあげなさい」

「はい」

「じゃあ行くよ創輝」

「うん。それでは失礼します」

数分後2人はミューリの母であるケイラの部屋の前に来ていた

2人が部屋の前まで来ると扉が開いて中から女性が顔を覗かせる

「あっお母さん」

「あらミューリ…そちらは？」

ミューリはフラークと話したことを話した

「そうなの…それは大変だったわね」

ケイラは創輝を抱きしめた

（母親はこういうものなのだろうか）

そんなことを考えているとミューリは不機嫌そうにこっちを見ていた

「あらミューリ…ヤキモチやいてるの？」

ケイラは悪戯っぽく笑いながら言う

「／／／そ、そんなことないもん！」

「ミューリも創輝君にギュッとしてもらっちゃえば？（女は度胸よ！ミューリ！）」

「えっ！？……うわっ！」

突然ミューリは創輝に飛びついた

「あらあら、創輝君、ミューリをよろしくね」

「は、はあ」

「あっお母さん！お姉ちゃん！」

不意に後ろから声がかかる

「あらハシユー」

「あなたはだあれ？」

「彼は創輝って言った、ハシユーのお兄ちゃんよ」「ちょっとお母さん！」

「だってそのうち…ねえ？お義兄さんって」

「お母さん！！／／／」

創輝は2人をおいてハシユーに話しかける

「僕は鹿内創輝だよ。よろしくねハシュー」

「うん！よろしくおにーちゃん！」

「創輝早速懐かれたね。なんか創輝の新しい一面を発見！って感じ」

「そうかなあ、まあ確かに向こうでも小さい子供には懐かれたなあ」

「そうなんだあ、創輝優しいもんね」

「そんなことないさ…そんなこと…」

ミューリは一瞬創輝が暗い顔をしたのを見逃さなかったが深くは追及しなかった

その後創輝はミューリの隣の空いてる部屋を貸して貰った

掃除も一段落して創輝はベットに横になった

「賑やかだなあ…まあこんなのもいいかな…でも俺は…」

創輝は呟くと睡魔に襲われ眠ってしまった

― 第3話 ―

「なあ、どこに向かってるんだ？」

「ふふっ、内緒―」

創輝とミューリはメインストリートを歩いている

30分前

「創輝―！創輝！起きて！」

「う、うう………おわうう！」

ミューリがベットに寝ている創輝に飛びつく

「お、おはよう、ミューリ……」

「おっはよう！創輝！出かけるよお！」

「今からか？ミューリは元気だな」

そっついながら創輝は起き上がる

「じゃあ玄関で待ってるね！」

ミューリはそっついって部屋から出ていった

創輝は着替えて剣を持ち玄関へ行く

「早くいっしょ！」

ミューリは待ちきれないとばかりに足踏みする

「はいはい」

2人はマイルさんに見送られ出かけた

朝そんなやりとりをし今に至る

創輝の横でミューリは鼻歌まじりにごく機嫌で歩いている

創輝はその楽しそうな横顔をみる

(ミューリにだけは昔みたいに接しられるんだよねあ)

「ん？どうしたの創輝？」

「なんでもないよ」

「そう？ならいいけど」

2人がしばらく歩くと人だかりが出来ていた

2人が人を掻き分けついくと男と少女が対峙していた

男は2メートル以上もある大きな剣を持ち、少女は短剣と銃を構えている

「あっミリシアと……ピラゴグだ」

「知り合いか？」

「女の子のほうミリシアって言って親友なの、強いんだよお、男の人はピラゴグでこの辺りで有名な剣士なんだよ、強いんだけど喧嘩っ早くて暴力的」

「今、謝ったら許してやるよ」

「だから私じゃないってば！」

「ほう、まだ言うか…じゃあ覚悟しな！」

ピラゴグはミリシアに向かって走り出す

ミリシアは牽制に銃で撃つ

ピラゴグは剣の面になっているところを盾のようにして防ぐ

そしてそのままミリシアに向かって突っ込み、剣を振り上げた

ミリシアはバックステップで直撃は避けたが銃は飛ばされた

「アクウオ！」

ミリシアが唱えると同時にビラゴグは後ろに飛びのく

ビラゴグが立っていた所から水が吹き出す

ミリシアは素早い動きで短剣で繰り返し攻撃する

ビラゴグは再び剣を盾のように使い防ぐ

しばらくビラゴグは防戦一方だったが、ミリシアがジャンプして空中から切りかかった瞬間、剣を返し短剣に刃を突き立てた

短剣はあっけなく碎け散った

「とどめだあ！！」

ビラゴグが切りかかる

ミリシアは空中にいるため避けられない

「ミリシアっ！！」

ミューリが叫ぶ

周りの者たちも止めに入ろうとした瞬間青白い光が瞬く……

そして大きな打突音……

「少々やり過ぎだと思えますが……」

そこは創輝が自分の剣でビラゴグの大剣を止めている姿があった

「黙れえ!!!」

ビラゴグは創輝に切り掛かった

「そう来ますか……なら仕方ありませんね」

創輝は再び大剣を受け止め、そのまま剣を振り抜いた

すると、大剣は真っ二つに折れてしまった

そして創輝はビラゴグの首筋を峰打ちし気絶させた

「お怪我ありませんか？」

創輝は剣を鞘に納め、ミリシアに声をかけた、と同時に

「君っ!!!私のパーティーに入らない!?!」

ミリシアは目をキラキラさせて尋ねる

「パーティー……ですか？」

「そう！」「ミリシア、お、落ち着いて」「おっミューリいと」「」
だから落ち着く！」「……はい」

「とりあえず紹介するね、こっちはミリシア」

「私はミリシア・ターマイン、よろしく！」

ミリシアは手を差し出す

創輝は握手しながら答える

「鹿内創輝です、よろしくお願いします」

「ミリシア、パーティー以前に創輝はコミュニティーに所属してないわよ」

「えええー、こんなに強いのに!？」

「創輝は異s……遠くの町から来たからね、ちょうど今連れて行くところだったのよ」

「あの、ミューリ、コミュニティーって何？」

「コミュニティーはね、まあギルドともいうんだけど、情報交換したり、あとは依頼を出したり受けたりできる所ね、登録すれば誰でも利用できるんだよ」

「ふむふむ、なるほど……で、パーティーはその依頼をこなす時のチームみたいなもんか？」

「そうだよ、それでちょうどここがコミュニティーなんだけどね」

ミューリは目の前の木造の建物を指す

「で、ミリシアはなんでコミュニティーの前でピラゴグに？」

ミューリがミリシアに尋ねる

「それがあいつ、私が財布盗んだとかなんとかケチつけてきてさあ
ー。私じゃないって言ったら決闘だ、ぶっ殺してやるって…ああ、
忘れてた創輝、さつきはありがと」

「いや、気にしなくて結構ですよ……それよりこの状況でこんなに
呑気に話してていいんですか？」

周りでは皆拍手喝采で大騒ぎしている

「いや、ゼーんぜんよくないかも」

ミリシアが苦笑いする

そうこうしているとコミュニティーの中から、1組の男女が出てきた

「君達？ピラゴグを倒してくれたのは」

男は気絶しているピラゴグを縄で縛り始め、女が話し掛けてきた

「あつ、トウーリアさんとクラインさん、そうですね…まあ正確に言えば彼ですけど」

「そう、私はトウーリア・ホスタイン。彼はクライン・シユラーよ。コミュニティの代表をしてるの、あなたの名前は？」

「鹿内創輝と申します」

「あいつ、昔は真面目なやつだったんだけど、1年前くらいから荒れちゃって、それでも罪もない人を斬ろうとすることは無かったんだけどね…私からも礼を言っわ、どうもありがと」

すると急に悲鳴が聞こえ皆散り散りに逃げていく

ビラゴグの体から何やら黒い物が出ている

「トウーリア！まずい、ビラゴグにシャドナルが取りついてたんだ」
「！」

「クラインは周りに被害がないように結界張って！ミリシア、ミリは私の援護お願い、創輝君は逃げ遅れた人を逃がしてあげて！」

「トウーリアさん、なんで創輝は戦闘に入れないんですか！？」

ミリシアが驚き、尋ねる

「未所属の人にSクラス相手に巻き込むわけにはいかないわ」

「えっ！？S！？シャドナルはDクラスじゃ？」

「おそらくビラゴグの様子が変わったのはあいつが原因よ、1年も、それもあれだけの力を持った人に取りついてたら、Sのナーベラスverになってるはずよ…それと、あなたたちも私が逃げると言ったら逃げなさい」

創輝は周りを見回す

ほとんどの人がすでに逃げたようであまり人は見当たらない

シャドナルが四方八方に黒い弾を飛ばす

「きゃー!!」

突然悲鳴が聞こえる

一人の少女が逃げ遅れていた

そこには黒い弾の一つが向かっていた

「ビューラ!!」

そこに少年が走りより庇うように覆いかぶさる

創輝は走って間に割り込み剣で受け止める

「ぐっ!!」

「き、君は？」

少年が創輝に話し掛けてくる

「い、いいからその子を連れて逃げて下さい」

「わ、わかった。ほら立てるかヒューラ」

少年は少女を連れて逃げていった

創輝はそれを見届け空に向かってはねあげた

黒い弾は結界に当たって消滅した

周りにはもう人はいないようだ

創輝は4人のところへ戻る

「避難誘導終わりました」

「ありがとう、創輝君……はっ！皆避けてっ！」

シャドナルが糸状の物を飛ばしてきた

創輝は近くにいたミューリを抱えて飛びのいた

しかし、他の3人はその糸状の物に吹き飛ばされ気絶し、その糸に捕まって動けない

「大丈夫かミューリ？」

「うん、ありがと……あっ！みんなが！」

創輝はゆっくり立ち上がり言う

「ミューリ……俺が斬るから援護頼む」

「そんな、無茶だよ！」

「今戦えるのは俺らだけだ、やるしかない……もし嫌なら皆を連れて逃げてくれ」

「……わかったわ、やろう！」

「ホントにいいのか？死ぬかもしれないんだぞ？」

「大丈夫だよ……私、創輝の事信じてるから！」

「そうか、ありがと……絶対、あいつを倒して無事に終わらせよう」

「うんっ！」

2人はシャドナルに向かって走り出した

―第4話―

「フラヴ！」

ミューリが唱えると火の球が5つミューリから放たれ、シャドナルに当たる

シャドナルは黒い円盤をミューリに飛ばしてくる

「お前の相手はこつちだ！」

創輝は黒い円盤を切り落とし、ジャンプして切り掛かる

シャドナルは再び糸のような物で受け止めるが切られる

創輝はそのままの勢いで縦に振り、傷を負わせる

傷を負わされたシャドナルは奇声を上げながら辺りに黒い球を飛ばす

「ウオラリ！」

ミューリが唱えるとあちこちから水柱が立ち球を打ち消し、そのままシャドナルに襲い掛かる

水柱はシャドナルを貫いた

「ナイス、ミューリ！」

創輝はミューリに声をかけ剣を納めた

「創輝危ないっ！」

「えっ！…うおっ！」

シャドナルが黒い球を創輝に向かって飛ばしてきていた

創輝はジャンプしてかわす

すると今度はシャドナルの傷口から黒いレーザーのような物が創輝とミューリそれぞれに向かって発射された

「くっ！（きゃあー！）」

「フラヴ！」

ミューリが火の球を飛ばすがレーザーにあっさり貫かれる

創輝は鞘に入った剣をそのままミューリとシャドナルの間に向かって投げる

ミューリのほうに放たれたレーザーは創輝の剣で打ち消される

創輝も空中で体をひねりレーザーをかわす

しかしシャドナルは触手を伸ばし創輝を叩き落とした

「創輝っ！」

ミューリが創輝に駆け寄り防衛呪文で防御壁を張る

「創輝は私が守るっ！」

ミューリはシャドナルに向かい合い、防御に集中する

(また…俺は守られるのか…)

創輝は意識が朦朧とする中、防御しながら反撃をしているミューリの背を見ながら考える

(そんなのは嫌だ……決めたじゃないか……あの日に……今度は俺が……)

「くっ！…魔力が…」

ミューリは魔力が切れてきて防戦一方になっている

強烈な一撃でとうとう防御壁が破られる

「はあ…はあ……ごめん、創輝……」

シャドナルはとどめとばかりに黒い波のような物を放つ

「俺が……守るんだああ！！！」

創輝は叫び、立ち上がる

一瞬景色が停止し…

次の瞬間シャドナルは斜めに2つに裂け、波がシャドナルの方へ戻

っていく

そしてそこには剣を振り抜いた状態の創輝が立っていた

「じゃあ創輝のパーティー加入と、Sランク認定を祝ってえー！」

「「「かんぱーい!!」「」」

創輝、ミューリ、ミリシアはコミュニティ近くの酒場にいた

「やっぱり創輝すごいねえ、いきなりSランクだもん」

ミリシアが感心する

「でもとどめ指したのが俺ってだけで、ミューリ居なかったら俺死んでましたし……まあ実際そのミューリもSランクになりましたけど……」

創輝がそう言うと慌ててミューリが照れたように言う

「そんな…創輝が居たから私も戦わなきゃって思えたんだし、それにやっぱり創輝じゃなきゃとどめさせなかったよ」

「はは…そう言って貰えるとまだ救われるよ」

「なーに2人していい雰囲気になってんだあ？」

ミリシアがニヤリと笑いながらからかう

「べ、別にそういつつもりじゃ／＼」

「いい雰囲気？どづいつことですか？」

それを聞いて、ミリシアは呆れる

「にりゃミューリ、苦労しそうだね……」

「？………ところでさっきから気になってたんだけど、そちらの人はミューリの知り合い？」

「そちらって？どこの人？」

「いや……そこに……」

創輝は自分たちが座っている4人席の空いている席を指す

「なっ！そなたには私が見えるのかっ！？」

「えっ！今の何？」

「見えますが…みんなには見えないのですか？」

「ああ、私は精霊だからな」

「えええええ！？精霊ですか！？」

「スゴイな！それも見えるって！」

ミューリとミリシアは口々に言う

「精霊ってなんですか？」

「そなた精霊を知らないのか!？」

「ああ…創輝は知らないよね、そもそも魔法は魔力を火、水、土、風などの属性を付与して、そしてイメージによって発現させるの。そして、精霊は属性を司る、象徴で、そのパワーの集まって生まれた生き物なんだ」

「なるほど…だいたいわかった、ありがとうミューリ」

「うん ……で、そこにいる精霊は何の精霊なの？」

ミューリは精霊に尋ねる

「私は混沌を司る精霊のマラスだ」

「混沌で、しかもマラスっ!？」

ミリシアが素っ頓狂な声を出して驚く

「えと…ミューリ、お願い」

「はい、えっと、まず混沌についてだけど、さっき言った属性には上位である、閃光と混沌があつて、この2つが下位のその他の属性をまとめ上げてるんだよ。ただ、閃光と混沌の精霊は仲が悪いら

しいの」

「そ、そんなことはないぞ、閃光のマラスと私は親友だしな。仲が悪かったのは6世代前のことだ、逆にそれ以外は皆、割と仲が良い」

精霊が慌てて訂正する

「へえー、そうなんだあー… ああゴメン、次はマラスについてだね、マラスってというのは簡単にいえば、その属性の精霊の王とか長つていう感じ…であってるよね、精霊さん？」

「うん、完璧だ」

精霊は満足げに答える

「それで…どうして俺には見えるんでしょうか？」

「精霊と契約した者は基本的に見えるのだが、そなたはしていないのだから？」

「していませんね」

「その場合、契約が可能な精霊しか見ることができない。そして、その組み合わせは世界中探しても、一組だけなんだ」

「なるほど、だからあんなに驚いていたのですか」

「それで…その…私と契約してくれないか？」

精霊は遠慮がちに尋ねる

「ああその前に…あなたの名前は？」

「創輝、精霊さんには基本的に名前はないんだよ？」

ミューリが言う

「では、俺が付けても？」

「ああ、いいぞ、その代わりに私へ敬語は止めてくれないか？なんかこう、契約するのに妙な距離があるのは…」

「そうだよ、私にも止めてよ、せっかくパーティーメンバーなんだからさっ」

精霊が言ったのを聞き、ミリシアも言う

「ああ…うん、わかった。えっと、名前が…うーん…チャオル…つてのはどうかな？」

「チャオルだな、うん……それで契約してくれるんだな？」

「うん…どうすればいいんだ？」

「ちょっとじっとしててくれ……」

おもむろにチャオルは創輝に顔を近づける

「ちよっ！」

思わず創輝は顔を引く

「だからじつとしてって!」

そして額同士がくっつく

すると2人は光り出し、5秒ほどしておさまり2人は離れる

「ちなみに契約すると、ふつうの人にも私が見えるようになるぞ」

「へえ、じゃあミューリにもチャオルのこと&……………あれ?どうした?」

創輝がミューリを見ると頬を赤くして、創輝とチャオルを睨みつけていた

「い、今何したのっ!?!」

「何って…チャオルと契約しただけだけど?」

「もっっ!そうじゃなくて!」

「ああ、そなたはミューリと言ったか……私はそなたが思っているような事はしていないぞ?」

「本当?」

「ああ…それにしても創輝、そんなんではミューリがかわいそうではないか」

「そんなんって?」

「はあー、もう重症だな……ミューリ、私も協力するよ！」

「あ、ありがとうっ！……改めてよろしくね、チャオル！」

「ああ！ミリシアもな！」

「うんうん！」

「だから重症ってどういことだよ！？」

「「「はあー」「」」

「えええええ！何か俺変な事言ったか！？」

「「「黙れ鈍感！」「」」

「ひ、ひどいっ！」

「よ、よしよし／＼」

創輝はうなだれ、その頭をミューリが頬を微かに赤らめながら撫でる

それを見ながらミリシアとチャオルは微笑んでいた

ーキャラさせていー(前書き)

キャラがまた増えてきたらこちらに追加していきまーす

ーキャラさせていー

鹿内 かない 創輝 そうき

15歳

この作品の主人公

髪：黒 目：黒

道で見つけた剣を鞘から引き抜いたところ、青白く光り出し気がついたら異世界に飛ばされていた

相手から言われないかぎり、敬語で話す

元の世界では高校生だったが、なぜか戦闘には慣れている

両親は物心つく前に他界

過去に何か事件が…？

ミューリ・ストライト

15歳

この作品のヒロイン

髪：金 目：茶

魔法に関する知識も豊富で技術も備えている

あまりに熱中して、魔力が切れるほど練習してしまつこともしばしば…

創輝とは、まさにそんな状態でライナードたちに襲われたときに出会う

創輝に好意を抱いていて、多少のアプローチをしても全く気づいてもらえずにいる

フラーク・ストライト

43歳

髪：茶 目：茶

ミューリの父親

町を治めている

相手の5日前までを見ることが出来るファークルがある

ケイラ・ストライト

43歳

髪：金 目：青

ミューリの母親

創輝のことを夫のフランクと共に、息子として受け入れる広い心の持ち主

ハシュー・ストライト

6歳

髪：茶 目：青

ミューリの妹で、創輝にかなり懐いている

ミリシア・ターマイン

15歳

髪：赤 目：茶

ミューリの親友

銃と短剣、魔法を状況に合わせて使い戦う

身のこなしもかなりすばやく柔軟

明るい性格でムードメーカー

チャオル

?歳

髪：黒 目：黒

創輝と契約した精霊

混沌を司る精霊でマラス、つまり閃光とともに他全ての属性をまとめ上げている属性を司る上に、さらにそれをまとめあげる長、という非常に高い位の精霊

トウーリア・ホスタイン

23歳

髪：金 目：赤

クラインと共に創輝たちが所属するコミュニティーのリーダーをしている

実力はかなりのようだが詳細は不明

クライン・シュラー

25歳

髪：紺 目：青

トウリアと共に創輝たちが所属するコミュニティのリーダーをしている

トウリア同様実力はかなりのようだが詳細は不明

マイル・コーミル

?歳

髪：白 目：茶

ミューリの家の執事

詳細は全くの謎でミューリでさえマイルのことは良く知らないとか

マイト・ガイラー

40歳

髪：赤 目：赤

ミューリの町の入口の門番の一人

筋肉隆々で大ざっぱな性格

カリユウ・シーラム

32歳

髪：青 目：青

ミューリの町の入口の門番の一人

真面目でマイトの大ざっぱさにいつも悩まされている

ピラゴグ・？

？歳

髪：金 目：茶

大剣の腕はかなりのもの

昔は正義感あふれる真面目な性格だったが、シャドナルに取り付かれてから暴れるように

ミリシアに襲いかかった所を創輝に止められ、その時にシャドナルから解放された

ライナード・クレイル

?歳

髪：茶 目：紺

草原でミューリルのもう一人と一緒に襲っていた謎の人物

本気で襲っていた訳ではないようで…その真意は？

― 第5話 ― (前書き)

なんかぐだぐだだあ

次はもっとまともになるよう頑張ります

―第5話―

「おにーちゃん!!」

ハシユーが創輝の部屋に駆け込んできた

「ああ、ハシユーどうした？」

「パパとママがお話があるから来てだって」

「そうかわかったよ、教えてくれてありがとう」

創輝はハシユーの頭を撫でる

「えへへえ、おにーちゃん早く行こー？」

「うん」

ハシユーに手を引かれ、リビングに入るとミユーリとフラーク、ケイラのみんながいた

「あーっ!!ハシユーずるーい!!」

ミユーリが突然叫ぶ

「こら、ミユーリ、ハシユーにまで嫉妬しない!!」

ケイラがミューリを叱る

「ううう…いいなあハシューくらいの年だったら堂々と手を繋いだり、抱きついたり…」

「ミューリもやればいいじゃない」

「無理だよー！！付き合ってもないのにー！！／＼／＼…ほ、ほら創輝待ってるから話しなきゃ」

「話って何ですか？」

創輝はケイラに尋ねる

「創輝は学校に興味ない？」

「まあ、向こうでは学生でしたからこちらの学校に興味が無いことは無いですけど」

「ならちよつどミューリが行く予定の学校に行ってみるのはどう？」

「行く予定ってミューリ今まで学校行ったことないの？」

「違うよー！！進学するの…！！」

ミューリは頬を膨らませる

「ああ、ゴメンゴメン」

「それで創輝？どうするんだい？」

「でも、学費とかありますし、悪いですよ……」

創輝は尋ねてきたフラークに答える

「大丈夫だよ、お金は贅沢すぎるほどあるから無駄遣いするよりは
こういうことに使ったほうが」

「でも……」

「もう！！遠慮しないの！！創輝は私たちにとっては、息子同然な
んだから！！ねえ？」

「ああそうだよ」

「それとも、私たちが親なんて嫌？」

「そ、そんなことないですよ！！フラークさんとケイラさんには感
謝してますし」

「なら遠慮しないの！！それと、そんな他人みたいな呼び方しない
の！！敬語もナシ！！……あつても本当の親のほうがいいわよね……」

「いえ、父も母も物心つく前に亡くなってますから……」

「そうだったのか…：すまない、イヤなこと思い出させてしまったな」

「気になさらないで下さい、親との思い出はほとんどないですし」

「ならやつぱり…私たちが創輝の親になるわ、何かあったら私たちを頼りなさい」

「ありがとうござんん？（チラッ）」…あ、ありがとう、ケイ」「え？（ギロリ）」…か、母さん」

「よろしい！！それで、行くのね？学校」

「行くよね？創輝」

ミユリが目を輝かせ、期待の視線を向ける

「ああ、行くよ」

「やったあー！！」

「ミユリ、創輝なら大丈夫だと思うが一応編入試験をパスしないと行けないんだからな」

「わかってるよー」

「試験って何をやるんでs…やるの？と、父さん？」

「実技試験と筆記試験がある、実技は学園の教師と模擬戦、筆記は数学と物理学、あとはいくつかの質問に答える、といった感じだったはずだが」

フラークは考えながら答える

「筆記か…勉強しないとヤバいかな…それで、試験はいつ？」

「ん？明日だけど？」

「……………とんでもない答えが返ってきた気がするんだけど気のせいだよな？ミユウリ……………」

「き、気のせいじゃないと思うわ……………」

「実技試験はどちらにしろ短期間じゃあどうしようもないからしょうがないし、ある程度は通用するみたいだからまだしも、筆記試験は、向こうの知識が通用しないかもしれないじゃないですか!？」

「そうよ、いくら創輝だからって明日いきなりなんて」

創輝とミユウリは必死にフラークに訴える

「大丈夫だよ、こつちより、創輝がいた所のほうが進んだ勉強をしているから」

「そうなんですか？でも、どうしてそんなこと分k…ああ、そういうことか」

「察しの通り、創輝のことを見たときに同時に見たもんで」

「でも、せめて多少復習はしたかった……………」

「もう男の子ならぐだぐだ言わない!!」

「お母さん、それは創輝がかわいそう……………」

「気にしなーい気にしなーい」

「……はあー」

創輝とミューリはあらためてケイラにはかなわないと思ったのだった

「そういえば創輝、チャオルちゃんはどつするの？」

「ああ、チャオルー！！ハシユーの相手ありがとう」

「いやいや、なかなか楽しかったからいいさ」

チャオルがいきなりハシユーと共に何もないところから現れた

「えっ！？チャオルちゃんいたの！？」

「帰ってきたら取り込み中だったから、話の邪魔にならないように姿を消してたんだ…創輝には気づかれたけどな」

「で、ハシユーが一人じゃかわいそうだから、俺がチャオルに相手を頼んだ」

「いつの間に…」

「ハシユーはかわいいな」

チャオルはハシユーの頭を撫でる

「えへへえ、また遊んでね!！」

「ああ!！」

「それで、学校に行くんだけど、チャオルどうする?」

「当然、私も行くぞ」

「おにーちゃんとチャオルちゃんどっか行っちゃうの?」

ハシューが目には涙を浮かべ、悲しそうに聞く

「大丈夫よハシュー、創輝とチャオルちゃんはミューリと同じ学校に行くんだから、いつでも会えるわ」

「えっ、どういうこと?」

「ハシューが行ってる学校は同じ敷地内にあるから」

ミューリがさかさず説明する

「ああ、なるほどありがとう」

「どうぞ致しまして」

創輝は礼を言われ、照れているミューリの頭を思わず撫でてみた

「ふみゃっ!!!／／」

「ああ、悪い、いやだったか」

「全然そんなことないから………むしろうれしいから、もっと撫でてくれても……」

「えっ？何？」

「な、なんでもない……なんでもない……」

「良かったわねーミューリ、ハシユーがチャオルちゃんに撫でられてるの見て、創輝になでなでして欲しくなったんでしょっ？」

「なっ………もう、お母さんのいじわる……」

「だって本当のことでしょ？」

「うっう……創輝……お母さんがいじめる……」

ミューリは創輝に泣きつく

「母さん、あんまりミューリをからかいすぎたらかわいそうだよ？」

「あーあ、またミューリはそうやってすぐ創輝に甘えてー、創輝も創輝でミューリに甘いんだからっ………もう私知らないっ………2人でとっとと学校に行っちゃえ……」

「ああ、もう母さんいじけないですよ」

「いじけてないもーんだ」

フラインクとチャオルはそんな様子を苦笑いしながら眺めていた…

―第6話― (前書き)

”キャラせてい”に髪と目の色を加えました

キャラの容姿については少しずつ加えて行きますので…

―第6話―

創輝やミューリたちは、全員で出発前の夕飯を楽しんでいた

「さあ、明日はシュライクに行くんだから、早く寝なくちゃ」

夕飯があらかた無くなったのを見てケイラが切り出した

学園があるシュライクという街は、俗に言う首都や王都で、王様が住み、政治の中心地になっている

ここエシュリケートはフラークが王様に認められ、この地を任せられて今に至る

そのため、シュライクとエシュリケートは距離が近いのと王族との結びつきが強いことから、交流も盛んだ

「ほら、ハシューー！！部屋に行くよー！！」

「はいー！！」

ミューリとハシューが走って部屋から出て行く

「あっ！！創輝はちょっと待って」

ケイラが創輝を呼び止める

「何？」

「今夜、家の裏の森に湖があるんだけど、そこに行ってみるといいわ」

「今夜!？」

「そう、今夜じゃないとだめ」

「今夜を逃すとだめなんだよ、行ってくれるかい？」

「父さんと母さんがそこまで言うなら行くよ」

「そうか、ありがとう」

「じゃあ、俺も部屋に戻るね」

創輝はそう言うと、部屋に戻っていった

「これでいいのよね？」

「ああ、彼には知る権利があるよ、それに創輝ならもしかしたら」

「そうね…というか私は彼以上の適任者は居ないと思えてきたわ」

「確かに」

そう言って、2人は笑いあった

風呂に入って寝る準備をして、創輝は皆を起こさないように静かに
屋敷を出る

裏庭にまわって、森へ向かう

近くには小川が流れ、空には満月が浮かんでいる

(川沿いに行けば湖に着くか?)

創輝は小川を頼りに森へと入っていった……

少し進むと大きな湖が見えてきた

創輝は湖のほとりを少し歩いて進むと木の陰に人がいた

創輝が近づいて行くとちょうど月明かりが差し込んでくる

そこに居たのは……

「ミユウリ?」

創輝が駆け寄ろうとすると

「ミユウ!?!……ミユウ!?!……」

ミューリが急に苦しみだした

「おい！！ミューリ！！大丈b「き、来ちゃだめっ」……………!?!」

ミューリの髪がだんだん紫色に変わっていき、目も紫色になる

「うああああああ！！！」

そして、突然強い力がミューリから発せられる

(なんていう気の量……………こっちで言うなら魔力か?)

創輝も体から気を発し、吹き飛ばされないようにし少しずつミューリに近づいていく

「落ち着け！！ミューリ！！自分を見失うな！！！」

「ああああ！！…嫌っ…来ないで…見ないで！！！」

「こんな状態でほっとけるか！！…くっ！！！」

創輝は少しずつミューリに近づいていく

「こんな醜い私は見られなくなかった！！！」

「醜いなんてことあるもんか！！！」

「嘘だ！！！」

「嘘じゃない！！！」

「だって…だってこんなに邪悪な色…」

「俺にはっ！！…綺麗に見えるけどな…」

「っ！？…そんな…そんなわけ…」

創輝はミューリに手を伸ばし、抱きしめた

「そんなに自分を卑下するもんじゃないよ」

「でも…」

「俺を吹き飛ばしそうになるほどに強いじゃないか」

「こんなの、満月で強くなると制御できない魔力なんて…」

「それでも、ミューリの魔力なのに違いない」

「いくら強くても、もう誰かに虐げられるのはいやだよ…」

「ミューリを酷く言うやつは俺が許さないから…」

創輝ミューリの頭にポンと手を乗せて言った

「ズルいよ、今そんなこと／＼／＼どうしてそんなに優しいの？」

「優しいのはミューリだってそうじゃん」

「えっ！？」

「いくら助けられたとはいえ、見ず知らずの人の”異世界から来た”なんていう話を信じなくて、衣食住も提供してくれる人なんてそう居ないでしょう？それと、知り合って数日の俺を信じて一緒にシアドナルと戦って、ピンチのときに守ってくれたりさ」

「それは、創輝のことが……」

「それに、こうやって湖に来てるのはまだコントロールできないその力で誰かを傷つけないから何だろ？」

「っ!?!?……うん……」

「もう一人で抱えこまなくていいよ……何があっても俺はミューリの味方だ」

「うん」

「俺じゃ頼りないけどさ、何かあったらできるだけ力になるから……」

「そんなことないよ……創輝が味方になってくれたら怖いもの無しだよ……創輝……」

「ん?」

「ありがとっ!?!」

その瞬間ミューリから発せられていた魔力の質が変化する

先程の攻撃的な物から優しく包み込むように、それでいて力強い

そして、髪が紫から水色に、目がピンクになっていく

「ど、どうしたの!? 私のこと見つめてノノノ」

「いや、髪と目の色が…」

「えっ…やっぱり嫌な色だ」いやそうじゃなくて!!」えっ!?!」

「髪が水色に…目がピンクに…なっていく…」

「ええっ!?!」

ミューリは手鏡を取り出し確認する

「ほ、ホントだ!?!」

そして、とうとう完全に色が変わる

「か、可愛い……………」

「ふえっ!?!」

「えっ!?!…いやっ…そのっ…つい本音がつて違って、ええーっただな」

「……………私……………可愛い?」

「あ、ああ…まあ、てかミューリなんかキャラ変わってないか？」

「…そんなことない」

「そうか？」

ミューリはこくと頷く

「…そうき」

「何？」

「…好き」

「はい？」

「…好き」

「み、ミュー」「好き」「好き」

「そ、そうか」

「……そうきは？」

「へっ！？」

「私のこと…好き？」

ミューリは顔を傾げて聞く

「まあ、好きだよ（友達として）」

「むう……鈍感」

ミューリは頬を膨らませ、いじけたように答える

「何が!？」

「…でも、好き」

「あ、ああ」

「…やっぱり分かってない」

「だから何が!？」

「…しょうがない…それなら…」

突然ミューリが創輝を押し倒した

「み、ミューリ!？」

「…創輝に分かってもらう」

「な、何をするんだ!？」

「…ふふっ…分かってるくせに」

「ちよっ!?!？」

ミューリが顔をゆっくりと近づけてくる

「ミューリ!!お、落ち着け!!」

2人の顔がくつつきそうなほど接近したところでミューリが元の金髪と茶色の目に戻る

「み、ミューリ?」

「っ!?!?!」

ミューリの顔が真っ赤に染まり、創輝から離れる

「えーっと…これはそのっ!?!?!自分でも止まらなかったというか…わかんなくて…あーっ」と

「う、うん、き、気にしてないから」

「い、ゴメン…」

「嫌いになった?」

「まさか、もう忘れたのか?」

「えっ?」

「何があっても、俺はミューリの味方だって言っただろ?」

「そうだったね」

「そろそろ帰ろうか？」

「そうだね」

2人は屋敷に向かって歩き出す

「あつ、創輝！！」

「ん？何？」

「さっきの”好き”は本当だから…」

「何？ゴメン聞き取れなかった」

「鈍感をなんとかしてって言ったの」

「なんだよそれ」

「悔しかったら、私の気持ちに気づいてみるー」

「ええー！？」

「じゃあ、ヒント」

ミユーリはおもむろに創輝の頬にキスした

「へっ？」

創輝は思わず呆ける

「ミューリは可愛らしく」きゃー」と叫ぶと屋敷に向かって走り出す

「お、おい!!ちよっ!!えっ!!?」

創輝は急いでミューリの後を追う、何を知らなかったのかをすりわすれて…

2人が屋敷に戻ると…

「あら、おかえり!!」

「「……えっ!?!……ええー!?!」

「お、起きてたの!?!お母さん」

そこにはケイラが居た

「すっかり寝てるかと思ったよ」

「気になって寝られなくてー」

「そうかなる程、創輝が来たのは、お母さんの仕業だったのね」

「まあ何も用が無いのに起きてた訳じゃないけどね」

「それっていったい?」

「話すにはちょうどいいと思って、ミューリのファークルについて」

「ええーとまずは、ファークルの内容についてね、簡単に言うと、発動してから一定時間魔力の質と量が飛躍的に上がるって感じ、一定時間が終わるとほんの少しの間魔力が使えなくなるんだけど」

「でも私もう使えるよ」

「ほんの少しの間だけだからね、でも魔法専門で戦う人なら戦闘中だったら致命的でしょう」

「そうだとしてもすごいなミューリ……」

「ありがとう、でもこれだけ強いとリスクとかあるんじゃない……」

「うーんと、リスクというかまず使えるようになるのが一番大変ね、使えないと今までのミューリのような状態になっちゃうのよ、満月の夜のように魔力が強まる時に暴走しちゃう」

「あれは、ファークルだったんだ……」

「ゴメンねミューリ…教えてあげようかとも思ったんだけど、変にもどかしい思いをしてほしくなくて……」

「ううん、気にしないで」

「ありがとう…使いこなせない人は結構いるの、強大な力と見た目故に嫌う人もいるわ」

「そうなんだ…それでミューリも…」

「次は使いこなせるようになるための条件について話そうかしら、これは一人じゃどうしようもないのよ、まず一つは、家族以外の人に理解と強い愛情を得ることと、二つ目はその相手へ愛情をもつことね、これは割と簡単、恋人ができればいいんだからね」

ミューリは思わず頬を赤らめる

創輝は相変わらずだが…

「はあー、ミューリも運がいいんだか悪いんだか悩みどころね…恋人ができる前に使えるようになったと考えれば幸運だけど、それがこうだと…まあ置いといて、三つ目はその相手に暴走を止めてもらうこと」

「えっ？じゃあ俺が止めたんですか？てっきりミューリが制御したのかと…」

「ミューリの魔力に対抗して魔力出さなかった？」

「あれやっぱり魔力だったんだ」

「えっ！？創輝知らずに使ったの？」

ケイラが驚く

「だって向こうの世界には魔法無かったし誰からも魔法の使い方教わってないし、俺は武術で使う”気”と思って使った」

「それである魔力って…でも良かったわ暴走を止めるには相手に触れて魔力を流せばいいの…でもその時創輝が使い方知らなかったらと思ったらヒヤツとするわね」

「もう!!お母さん!!もし、創輝に何かあったらどうするつもりだったのっ!?!」

「まったくミューリは創輝のことになるとすg」お母さん!!」はい!!ゴメンなさい!!!!」

「まあ、何事もなかったんだから、な?」

「創輝がそういうなら…」

「あつ、リスクあったわ、ファークルを発動するときには、使いこなす為の条件を揃えた相手へファークルの保持者は愛情を押さえ切れなくなる、と同時に性格が少し変わっちゃうこと」

ミューリの顔が真っ赤に染まる

「それと、使いこなす前みたいに満月の夜は暴走しないと魔力が溜まりすぎて危険ってことはないけど、強い魔力にさらされたり満月の夜に月明かりに当てられると勝手に発動しちゃうことね…」

ケイラはいたずらを思いついた子供のように笑い…

「こんなふうにつ!!」

ケイラは魔力を発する

すると、ミューリの髪と目が水色とピンクに変わる

「ちょっと！母さん！...」
「...そうき...！」
「うわっ...！」

ミューリが創輝に飛びつく

「...ひどい」

「えっ!?!」

「...そうき...嫌い」

「...そうき...嫌い」

「...私のこと...嫌い？」

ミューリが涙目で聞く

「き、嫌いじゃないよ」

「...ミューリ、創輝はきつとミューリに抱きつかれてドキドキしてるのよ」

「ちょっと...！火に油を注ぐようなことしないで...！」

「...そうなの?」
「...きつときつと」

「あ、うん、そりゃあ、まあ……」

「……（パーツ）」

「そ、そんなに嬉しいのか？」

「……ドキドキする……意識してる証拠」

「……」

「……そっさき」

「ん？」

「……私もドキドキしてる」

「えっ？」

「……好き」

「そ、そう」

ミューリは創輝に顔をすりすりする

「ほら二人とも明日早いんだから寝なさい」

「……むう」

ミューリは不満そうにケイラを睨む

「そんな睨まないの、創輝と一緒に寝てもらえばいいじゃない」

それを聞いて、ミューリはシュバツッと立ち上がる

「…行こ？」

「年頃なんだし別々のほうが」

「…や！！」

「いや、だから」

「…や！！」

「俺だって男なんだからなにかするかもしれないんだぞ」

「…いいよ」

「あのおな」

「（おみじり）…」

「…」

「…お願い」

「…」

ミューリは上目遣いで創輝をじっと見つめる

「……わかった、俺の負け」

「…（パーツ）」

ミューリは創輝の手を掴むと猛スピードで走って出て行った

ミューリは創輝の部屋に着くとベットに入る

「…早く」

「はいはい」

創輝がベットに入ると、ミューリが創輝を抱きしめる

「ちょっと！？ミューリ！？」

「…寝られない」

「はい？」

「…何か抱きしめないと」

「そういふこと…なら…しょうがない…のか？」

「…そうき…あったかい…いい匂い」

「そじゃとじま…」

「…そうき」

「何？」

「…呼んだだけ」

「そう」

「…そうき」

「今度は何？」

「…ありがとう」

「…どう致しまして」

創輝はそう答えるとミューリの頭を優しくなでる

ミューリは気持ち良さそうに目を閉じる

数十分後、ケイラとフラークが部屋を覗くと、2人は幸せそうに眠っていた

それを見て、ケイラとフラークは微笑み合い、明日以降の2人の身を案じ、心の中で娘を応援すると、満足そうに部屋を出て行った

― 第7話 ― (前書き)

今回は前回の流れが続きます

短めです

― 第7話 ―

創輝は拘束感と温もりに目を覚ます

いつもと違う感覚に戸惑い、寝起きのぼつっとしていながらゆっく
りと状況を把握する

(我ながらよく寝られたものだな)

苦笑いしながら、首筋に寝息がかかりくすぐったそうに頭だけをそ
の寝息が来るほうへ向ける

「ふふっ…そうきい…へへえ」

隣には創輝を抱きしめ幸せそうに寝ている少女がいる

寝る直前に見た水色の髪ではなく今は金髪だが…

「どんな夢見てるんだよ、まったく…」

創輝は呆れながら、ミューリのやわらかそうな頬をぶにぶにとつつく

「ん、んあ？…ううん…創輝？」

「あ、悪い起こしちゃったな」

「ううん…あれ？なんで創輝が私の部屋に？」

「ここ俺の部屋！昨日ミューリと一緒に寝るって言って聞かなか

「たんじゃないか」

ミューリは目をこすり辺りを見回す

「そんなこと言っつてえ、創輝が連れ込んだんじゃないのお？」

「そんなに赤い顔してたら全く効果ないからな？それに、性格変わったからってその間のこと覚えてないなんて話聞いてないぞ？」

「むう…いじわるう」

ミューリは頬を膨らませる

「そんな顔するやつはこうしてやるっ」

創輝はミューリの膨らんでいる頬を勢いよく押す

『ぶうー』

「ぷっ！！…アハハハ！！！」

「もっつー！！ひどいなあ！！！」

「アハハ…悪い悪い…つい…くっ、ハハハ」

「罰としてごうだっ！！！」

ミューリはぎゅっと思いつきり力を入れて創輝を抱きしめる

「あー、まいったまいったー」

「あー！！バカにするなー！！」

「だって痛くないもーん、そんなことやって辛いどころかむしろ喜ばれるだけだろ？」

「えっ！？…（喜ばれる！？…創輝もうれしいのかな！？…で、でもいつもやるのは恥ずかしいかも、付き合ってもないし…でもでも！…うれしいってことは、チャンスはあるよねっ！！…）」

「おーい？ミューリ、どうした？」

「へ？…だ、大丈夫大丈夫！！」

「お楽しみのこと悪いけど、そろそろ支度始めてね」

「「えっ！？」」

2人がバツと離れてドアのほうをみるとケイラが立っていた

「か、母さん…い、いつからいたの」

「えーとね、創輝がニコニコしながらミューリのほったんツンツンしてたところくらい？」

「んなっ！？」

「え？私が寝てる間に私のほっぺたツンツンぷにぷにムニムニしてたの？」

「そ、そんなにいっぱいやってないよ！！すぐミューリ起きたし…」

「じゃあ起きなかつたらずっとやってたのかなあ？」

「うぐっ…！…」

「さあさあ、白状してしまいなさいな」

ミューリはさっきの仕返しと嬉々と創輝に迫る

「……申し訳ありませんっ！！つい出来心でっ！！…ミューリさんのかわいらしいほっぺの感触を楽しんでました！！」

「くっ！？（かわいらしいっ！？／＼だ、ダメ、このままじゃまた負けるわっ）じゃあそんなほっぺ大好きな創輝君はどうしようかしら…」

「その言い方じゃ、ほっぺフェチみたいじゃないか…」

「珍しいわね、ミューリが創輝に言い勝ってるなんて」

「うーん、そうね…じゃあ条件を2つつ…！…」

「な、なるべく軽いのを…」

「1つ！！たまには、今日みたいに一緒に寝ること」

「これまたミューリ、大胆に出たわね」

「お母さん!!」

「まあそれなら…なんかいつもより安心して寝られたし、どちらかというと男と寝るとかいいのよ」

「そ、創輝だからいいのっ!!」

「なんだそりゃ?…それに学校入ったら寮なんだから無理じゃないか?」

「そういえばそうかも…」

「それで、もう1つは?」

「うーんと、じゃあもう私以外の人のほっぺはツンツンすることを禁じる!!」

「いや、だから俺はほっぺフェチじゃないって!!…というかミューリのほっぺに惹かれただけ!!…俺に変態趣味は無い!!」

「ふみやあつ!?(私のほっぺに惹かれた!?!?!)」

「鈍感にはやっぱり勝てないか…無自覚にあんな事言うなんてもはや犯罪ね」

ケイラが呆れて2人を見る

「ほら、2人とも、支度支度!!」

「……はっ！？…はい、じゃ、後でね創輝」

ミューリとケイラは創輝の部屋を出て行った

「大丈夫よミューリ」

「へっ？何が？」

「後は相手が自分の気持ちに気づくだけよ」

「何のこと？」

「わからないならいいわ」

「ええー！？」

「ふあああー、さてと、俺も支度するか」

当の本人は全く気づく気配はないが……

― 第7話 ― (後書き)

次回こそは出発する……はず……

―第8話― (前書き)

更新遅くなりました、すみませんでしゅ

ちょっと短めです

―第8話―

「それじゃ、出発するよ」

「皆様、お気をつけて」

執事のマイルさんに見送られ、創輝、ミューリ、フラーク、ケイラ、ハシユーの5人は、王都に向かって歩きだす

しばらく歩いて、森の街道を抜けてるとき、創輝がつぶやく

「なんか意外ですね」

「何がだい？」

「こう、もっと大所帯で行くのかと」

「ははは、確かに僕たちのような身分でこんな手薄な移動をする家はないだろうね」

「やっぱりそうですか…まあ、俺もそのほうが気楽でいいけど」

「でも、元々そういう生まれじゃないから慣れないし、僕は守ってもらつより自分も含めて、自分で守りたいから」

「俺たちにとつちや好都合で何よりだなア！！」

バツと全員が警戒態勢に入る

周りには汚らしい格好の男たちが取り囲んでいる

「賊か…」

「俺は何人くらいやれば？」

「いや、攻めは僕がやる、創輝は3人を守ってやってくれ」

「了解」

2人は不敵に笑って構える

「ごちゃごちゃ言ってるじゃねえ!!おら!!おめえら!!奪ってやれえ!!!」

一斉に賊たちが飛びかかってくる

全員が構えた瞬間…

賊たちが突風に吹き飛ばされる

「はあ…めんどくさい、まったく…」

1人の男が木の上からくるくると回転しながら降りてくる

「やあ、フラーク」

「ひさしぶり、お前も大変だな」

「ライナードさん!?!」

「おう、この前ぶりだな…鹿内、とこの前は悪かったな、嬢ちゃん」
「むう…」

「そう怖い顔すんなや、つととりあえずこいつら目覚ます前にとつとと行こうか」

周りを見ると賊たちが泡を吹いて倒れていた

「いやあ、あの学園長、自分であの子が気になるから襲って実力見てこい！！なんて言うくせに、今度はお前が襲ったんだから謝ってこいだぜ？」

「ははは、あいつも相変わらずだな」

「二人は知り合いだったの？」

「ああ、昔ちよつとな…そんなことより、もうすぐ着くよ」

「創輝は初めてだったよね、きっとビックリするよお」

「そうなのか？じゃあ、期待しとこうかな」

目の前に木で出来た大きな門と長くて高い壁が見えてきた

門の横に小さな扉の前に全員はやってきた

フラークが扉の横に手をかざす

ピピッと電子音のあと扉が開く

「まさか…静脈認証…?」

「ストライト家の方々でしょうか?」

中にはスーツを着た若い女性が立っていた

中は無機質な金属で出来た部屋で照明であかるく、創輝の居た世界よりも未来な技術が使われていそうだ

「そうだよ」

「そちらのお二人は?」

「ああ、俺は…っとこれだ、ほいよ」

ライナードはカードを差し出す

女性は受け取ると機械に差し込む

しばらくすると機械からカードが出てくる

「こちらご提示ありがとうございます、認証できました…そちらは?」

「こっちは鹿内創輝だ、話は通してあるはずなんだけどな」

「あなたがですか…」

女性が創輝を見つめる

創輝もじっと見つめ返す

(この女の人、さっきから隙がない…)

女性が少しプレッシャーをかけてくる

ちよつと武道をかじった程度の生半可な人なら動けなくなり、ある程度戦える者でさえ逃げ出す程だろう

しかし、創輝は女性に笑顔を返した

「わかりました、話は聞いています、ですが念のため、身分を証明できるものはありますか？」

「えーと、コミュニティー手帳なら…」

創輝は手帳を渡す

「お預かりさせていただきます」

女性がデスク前の椅子に座りボタンを押すとホログラムのディスプレイとキーボードが現れる

女性がしばらく操作するとさっきカードを入れたところからカードが出てくる

「はい、こちらがコミュニティ手帳で、こちらが登録カードになります」

「ぜひ、ありがとうございます」

「では、改めて、王都、またの名を…科学都市シュライクへ」

―第9話―

「っ!?!」

創輝は言葉が出なかった。この世界に進んだ科学技術があつたのだ。それも元の世界より進んでいる・・・

これまで、ファンタジーな世界だと思つていて、そこまで科学技術は進んでいないと思つていた創輝には衝撃的な光景だつた

高層ビルが建ち並び、車のようなものも走つて・・・いや飛んでいるといふ表現が合うだろうか。タイヤはついておらず、そのかわりスラスターのようなものがついて浮いている。道路もこれまでこの世界で見た道のように土をならしたようなものではなく、舗装されている。掲示板や看板はホログラムで表示され、ビルの壁には大きなディスプレイが広告を流している

「ねっ?びつくりしたでしょ?」

ミューリがいたずらが成功した子どものように楽しそうに笑いながら、驚いて固まっている創輝に話しかける

「ああ、こっちは魔法が中心で科学なんてほとんどないと思つてたからな。」

「もちろん、魔法が中心だよ。ここにしか科学技術の発達した街はないからね。だから、ここに来た事がない人たちは科学なんて空想の物だと思つてる。あつ、ちなみに前に見たソーシエリーリングももとはここで作られた技術が使われてるの」

「チャオルも知ってるのかな？」

「たぶん知ってると思うよ“混沌の精霊、万物を司る者”なんて言うし、ちなみに閃光の精霊は万物を照らす者って言われてるよ、そういうえば、朝からチャオルちゃん見ないね」

「チャオルは他の精霊のマラスに報告に行ってるらしいよ、学園に着く頃に合流するってさ」

「おねーちゃん！！おにーちゃん！！はやくうー！！」

2人はハシユーの声に置いて行かれていることに気がつき、あわてて駆け出した

一行はひとつの高くはないが、敷地の広い建物に到着した

「じゃあ、俺はあの”ガクエンチヨウサマ”がお待ちでしょうから学園にもどるな」

「ああ、いろいろありがとなライナード」

「子ども達を頼みます」

「ああ、わかってるって、まったく、フラークとケイラの願いじゃ断れねえじゃねえか」

「ちょ、ちょっと、俺まだ合格したわけじゃないし気が早いって」

創輝が焦って話しに割り込む

「創輝、試験落ちるわけないわよね？」

「ひっ！？・・・はいっ！！受かりますはずですよ！！（母さんの笑顔が怖いつ！！）」

「あはは、創輝言葉が変だよお？」

「ははは、まあ鹿内の実力なら大丈夫だろ、それに、アイツにも気に入られてるみたいだしな」

「「あらら・・・」」

フラークとケイラが頭を抱える

「えっ！？どういこと！？」

「まっ、気をしっかり持つことだな、鹿内」

「「ミューリ、創輝が邪な色気に惑わされないようにしっかり守るのよ」

「ええっ！？・・・うん、うん」

「ああ、それなんだが、ミューリもアイツのお気に入りだ」

「「はぁー」」

フラークとケイラは大きなため息をつく

「創輝、娘は頼んだよ」

「は、はい・・・よく分かんないけど、了解です」

「じゃ、鹿内、ミユーリ、学園で待ってるぞ」

そう言ってライナードは去っていった

目の前の建物はシュライクでのストライト家の家らしい

室内には見た目は少し違うが、創輝のもとの世界にもあるような家電が結構あった

「創輝の試験もあるし早く昼食食べちゃいましょう」

そう言ってケイラが台所に歩いていく

「あつ、俺も手伝うよ」

「創輝、料理できたの!？」

「うん、まあ・・・」

「じゃあお願いするわ」

「ここか…シユライク総合学園、案外、”学校”って感じだな」

創輝は試験を受けに学園に来ていた

外観はあまり元の世界と変わらなかった

「うつつ、ちょっと緊張してきた」

創輝は緊張を紛らわすように足早に事務所に向かう

「君が鹿内創輝君かな？」

突然の横からの声に少し驚きつつ、冷静を装って声の方へ向く

そこにはここの制服をきた女の子が立っていた

かわいらしい顔立ちのその子は興味深々といった感じで創輝を見ている

「そつですが…あなたは？」

「おつと、まだ名前言ってなかったね！！私はトールライシャ・フアイラリート、そうきゅんは編入試験受けに来たんだよね？」

「何ですか、そのそうきゅんって」

「えっ？ニツクネーム？」

「…僕に聞かないでくださいよ」

「で、どうなの？」

「確かに試験受けに来ましたよ」

「ふーん、何で新入生のタイミングに編入試験で来るのかな？ただ、受け忘れとか突発的な思いつき…なはずはないよね…何でかなあ」

「残念ながら突発的な思いつきです」

「そうかなあ？」

トールライシャはじっと創輝を見つめる

創輝は涼しい顔で受け流す

しばらく時間が止まったかのように、2人の間に沈黙が生まれる

「何か隠してるよね？」

「話すべきことはありませんが？」

トールライシャは片手を挙げる

すると、創輝の上から氷柱が降ってくる

しかし創輝は全く動かない

氷柱が降り止むとそこには無傷の創輝が立っていた

「おおっ！！すごいねそうきゅん！！」

「何言ってるんですか、わざと外したくせに…」

「普通は避けたり、相殺したりするもんだよ？冷静なんだね」

「ただ、めんどくさがりなだけですよ」

「あははは！！…！、面白いね、そうきゅん！！…！…！」

こちらを探るように見ていたトールライシャが急に雰囲気やを和らげ
笑い出す

そして、トールライシャは真っ直ぐ創輝をみると言った…

「うんっ！！そうきゅん合格っ！！」

「……………は？」

「うん、だから、鹿内創輝君は編入試験合格っ！！」

「はあ…では、時間無いので事務所行きますね？」

「うん、いつてらっsy…ってだから！！事務所行く必要無いからね！！ほら、これ合格通知と制服！！」

「ちよっ！！その制服どこから出したんですか！？」

「気にしたら負けだよ、そうきゅん！！」

「はぁ、大丈夫か？この学校」

創輝の咳きは学園の雑踏に打ち消されて消えていった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9097t/>

剣に乗って異世界へ

2012年1月7日01時55分発行